輝く宇宙の
つくりかた

SORATO & YASU

僕のたどり着いた
ひとつの答え
創造の次なる領域へ…

序文

　初めて本を書きたいと思ってから早数年、どうやって書いたらいいのかも分からずあふれる思いをただノートに書き記していた。
　そして、今、ひとつの思いを僕は形にする。
　たくさんの思いと葛藤。それが僕を今日まで導いてくれた。命とのふれあい、自然との関わり、そして探求。
　僕はずっと孤独だった。人を信じることができず、自分が生きる意味を見失っていた。それでも何かに導かれるように自分なりに懸命に生きてきた。何度も絶望した、あきらめかけた。それでもかすかな希望を目指して生きることを選んだ。僕自身の成長と進化を信じて。人々が互いのすべてを尊重し、認め合い、助け合う世界が来ることを信じて。
　この本に託しているひとつの思い。
　それは僕が悩み、苦しんでいたときに触れたかった言葉。
　スピリチュアルという葛藤の中で、ずっと触れたかった言葉たち。
　過去の僕を救うために書いたのかもしれない。
　宇宙の中を駆け巡りながら、地球に生まれ、愛を探してきた。ずっとずっと探してきた。
　たくさんの転生の中で、たくさんの命がつながれた。数多の命のかけらが今の僕に命を与えてくれている。みんなの思いを昇華して、すべての思いを愛へとつなぐ。
　過去のすべての感性と能力を今ここに甦らせる。それは弔いであり、命を抱きしめること。

愛を教えてくれたたくさんのスピリットたちに
地球という素晴らしい空間をともに生きる命に
宇宙のすべてに
そして地球への感謝とともに

ＹＡＳＵ

僕という意識の狭間で

　僕はいつも葛藤していた。肉体？スピリット？多次元？光？闇？ワンネス？外的な情報によって気付きを得て成長もしてきた。だけど進めば進むほど、たくさんの疑問と葛藤が増していく。それはその通りなのか？本当に今しかないのか？愛がすべてなのか？疑問だらけだった。そしてその答えは誰も教えてくれなかった。きっと今までに読んだ本の中にある種の答えやヒントはたくさんあったのだろう。だけどそのときには気付けなかった。ましてや自分で答えを見つけたい性格なので、基本的に外部から入ってくる情報を信用しない。だからこそ常に探求し続けていた。
　たくさんのガイドと、たくさんの存在と、ハイアーセルフにヒントをもった。納得のいかない回答もあった。でも、それでもみんなきちんと答えてくれた。そして今、僕の中での一つの大きな枠組みと、創造をゼロから始めるためのひとつの大きな答えにたどり着いた。
　葛藤は減り、自分のやるべきことも明確になってきている。それをどう実行に移し、安全に行うかということの方が今は課題。
　僕は何もしない。ただ宇宙のたくさんの光の存在たちが自由に光をおろせるように場をつくるだけ。場をつくることが、場を提供することが僕の仕事。すべては光の存在たちが行ってくれるという視点を忘れなければ、完璧なプロセスは完璧に進行していく。
　そして今僕のたどり着いた一つの大きな枠組みも、きっとこれから変化していくだろう。今納得のいっている答えも、いつしか覆るような情報によって、僕を楽しませてくれるのだろう。
　伝えれば伝えるだけ、実行すれば実行するだけ次の光が降ろされる。情報を僕に与えてくれる。
　僕は答えが知りたい。答えなんて無かったという答えにたどり着くかもしれない。それでも僕は知りたい。この宇宙の秘密と、すべてを超えたその光の真実を。
だからもう進むしかない。
　進んでいくための情報はそろった。あとはすべての大いなる流れを信頼して行動あるのみ。やるしかないのだ。
　僕なりの真実と、僕という感性を表現し、伝えること。
　それが僕の使命。

はじまりはここから

　なにもかも始まるのはいつもここから。今というこの瞬間にすべてが始まる。いつか目覚めるのを夢見て、いつかの天国を夢見て、準備をするのか？いつかは永遠にいつかだ。
どこからともなく忍び寄るスピリチュアルという罠。あそこが、あれが、あの人が。いつからあなたはあなたを失ったのだろう。
本も、人も、言葉も、メッセージも、すべてはヒントでしかない。
どんな言葉もその人を反映する。
どこから生まれ、どこから来るのか。ここで生まれ、ここで死ぬのだ。
永遠のいつかを夢見て、過去から未来までを渡り歩く。
ここはどこかと夢から覚めたのなら、いつかはいつかではなく、永遠の今であったことに気づくだろう。
過去も未来もない。時間軸という宇宙の中の非日常の世界には過去もあり未来もある。そしてすべてはここにある。
いつかの世界を「いつか」生きるのなら、いつかのあなたはこう言うだろう。「いつかは、いつなんだ。」
今はどんなときか。悩み、苦しみ、考えるときなのか。
答えは…「いつか」も「今」もなにもない。今というこの瞬間にすら、私たちは存在できないのだ。なぜならば、今というこの瞬間こそ幻だからである。
今という時間軸を生きるとき、世界はあなたを中心に回り始めるだろう。
それは素晴らしいことである。永遠のいつかから、今この瞬間にあなたはたどり着いた。
そして神聖な選択と、神聖なる創造が始まる。創造の始まりはいつもここにある。
未来があなたを待ち望むのなら、あなたは今を生き抜くことしかできない。
絶え間ない息継ぎと、癒えることのないこの世界にあなたは命を紡ぐのだ。
今というこの世界に、感情も、論理も、思考も反映されるだろう。
今に生き続けるということは、創造の責任を持つということである。
感情を支え、抱き、恐れを創造し、愛をも生み出した。恐れが幻ならば、愛も幻だ。
愛がすべてなら、恐れこそが愛。
愛はすべてではない。愛も創造物だ。
恐れは存在し、愛も存在する。宇宙にはなにがあるのか。宇宙には創造しかない。
ここで始まり、ここで終わるのだ。
この今という呪縛の中から抜け出したとき、今という瞬間に疑問を抱いたとき、世界は流れを止め始める。
過去にも未来にも、そして今にも、ただ在るのだ。
すべてが今、「在る」のだ。

今という世界から、在るという世界へと移行を果たしたとき、これらはふたつでひとつであることを悟るだろう。
今、在る。
存在は在るのだ。そして、過去にも未来にも在り続けるのだ。
今にはなにもない。そしてすべてが在る。
ゆえに創造は選択であり、ここには創造が在る。

世界は始まり、ここに終わる。

二つの世界が組み合わさり、愛へと昇華する。
光と闇を学んだとき、愛はどこに生まれるのか。
恐れも、喜びも、至福も、すべてが創造物だ。
そして、愛は、最後の選択肢だ。

愛にたどり着いたとき、あのいとしい世界は常に在り続けていたことを知る。
この宇宙の原初から、宇宙の終息まで、いとしい世界は在り続ける。
この地球でのさまざまな体験が、いくつもの時空と次元を体験させてくれた。
ときには恐れの闇を、ときには至福の光を。
この神聖な体験をなんどもなんども続けてきた。
あきらめることなく、神を目指した。
そして、今にたどり着く。
愛はここにも、そこにも在ったのだ。

宇宙を越えてたどり着いた場所

僕達は科学によって原因と結果の世界を探求する。
さまざまな実験を繰り返し、考察し、発展させてきた。
宇宙も同じように実験を繰り返している。

僕達にはひとりひとつの宇宙が渡される。
始めに宇宙を創る。
宇宙という空間を創るのだ。
そこには闇も光もない。ただ創りたい宇宙を創るのだ。
ときには「闇」。そしてときには「光」。
無という宇宙もあるかもしれない。

われわれは創られた宇宙に入る。
入る時点では私たちの感覚は無。
それは工場のように、機械的な作業に見えた。

光の宇宙に私たちが入るとする。
入ると同時に優しく愛に満ちた宇宙を感じる。
その時点では我ありに気づく前段階。
ゆえに光であふれていることも、愛の世界であることも知らない。
そうして、ひとつの宇宙、ひとつの感覚としての愛を体験する。
やがて、宇宙は収束し、終わりを迎える。
そして、私たちはまた無へと戻るのである。

また順番がめぐってくると新たな宇宙がそこには用意されている。
こんどは闇の宇宙。
そこは恐れと、孤独、得体の知れない不安感で満たされている。
私たちはまた宇宙へと入る。

入ると同時にこれまでの宇宙の記憶が呼び起こされる。
そして、この新しい宇宙では闇を体験する。
得体の知れない不安感と、孤独が押し寄せてくる。
しかし、それが不安であることも、孤独であることも私たちは知らない。
なぜなら、まだ体験したことがないから。

しかし、ふと記憶の中に優しく、温かい感覚が思い起こされる。
そうして私は知るのだ。
これは前とは違う。ここはとても寂しく、悲しい。
私たちの宇宙意識は体験を増やしていく。
だが、まだこの感覚を自然なものとして抗うことなく受け入れる。
なぜなら、その感覚に善も悪も持ち合わせていないから。
ただ不安と孤独という感覚が在るのだ。
以前に感じた優しい光と同じように。
そうして意識の深い部分で思い起こされた優しさと、実際に感じている不安や孤独という感覚。
これらを感じながら、またこの宇宙は時を経て収束し、終わりを迎える。

宇宙の収束とともに、私たちはまた無へと帰る。
不思議なことに、今度は無の領域でふたつの宇宙での感覚が呼び起こさる。
それはとても不思議な感覚。
周りにいる誰一人として、感覚というものを持ち合わせていないように見えるから。
感情や、表情、すべてを失ってしまっているように見えるのだ。

しかし、私たちはまだ無の中に居ることを拒否できない。
無という感覚と、何かが確かにあったのだという感覚の中で、「私」を体験する。
それでも私たちはまだ、無なのである。

そうして三度目の宇宙が用意された。
今度はどんな宇宙なのだろうか。
期待にも似た思いが沸き立つ。
無という感覚の中で。

宇宙は始まる。
なにもない感覚とともに。
ただそこに静かにたたずむ意識。
光でも闇でもない宇宙。
私たちは無を、在るを感じている。
静かに宇宙はめぐる。
まだ星も銀河も存在していない。
ただ宇宙という空間を体験している。

実験は次の段階へと進む。
私たちの宇宙に外部から新たな意識が注入されようとしている。
その感覚は闇。
もう一度言うが、宇宙の創造という実験の場において言葉としての光と闇の定義はあっても、すべてが純粋な意図の元に創造されている。
彼らにとって、光であろうと闇であろうと同じことなのだ。

私たちは静かに意識を漂わせていた。
すると突然、自分ではない感覚が押し寄せてくるのを感じた。
前にも感じたこの恐怖。
その瞬間、私は激しく光り、目を覚ましたのだ。
初めて私という存在を体験した瞬間だった。

気づくとまた、私たちは宇宙を漂っていた。
闇は消え、私は大きくなった。

ふとあの感覚はなんだったのだろうと浮かんでくる。
思考ではなく、感覚。
私は宇宙。
感覚のみが存在している段階。
疑問にも似た感覚が時間をかけて育っていく。

そうしてまた、外からなにかが注入されようとしていた。
今度は光。
偉大なる光。

光の注入とともに、私たちは寂しさを覚える。
光に圧迫され、端のほうへと追いやられているような感覚。
寂しさと、孤独が私を埋め尽くしていく。
泣きたいような気持ちが私を覆い尽くす。
涙は流せないが、そのような感覚が私を覆うのである。
悲しく、寂しい。帰りたい。あの場所へ。

次の瞬間。私は光の中にいた。

あの優しい光の中に。

私たちの疑問はさらに高まる。
光も闇も体験としてどんどんと積み上げられていく。
積み重なるほどに、疑問は強くなる。
しかし、答えは分からない。
なぜならば、思考が存在していないから。
感覚のみが、私を包むのだ。

ふと、闇を思い出す。
するとどこからともなくあの孤独なエネルギーが襲ってくる。
私は目覚める。
また、宇宙意識へと還る。

ふと、光を思い出す。
すると今度はあの優しい感覚が私を包み込む。
これでいい。
そう感じた瞬間、私は目覚め、また宇宙を覆っていた。

ますます疑問は深まっていく。
あの感覚は幻か、それとも真実なのか。
思考ではない思考が生み出されていく。

あるとき私は気づいてしまう。
あれはなんだ？
あの感覚は？
あの不安や孤独は？
私は？

無から始まる意識が、在る世界に放り出され、無の中で意識を積み重ねる。
無が、有を経て、在るに気付き、私になるとき。
宇宙は存在としての自立を始める。
宇宙が意識を分け、統合の喜びを覚える。
離れては合わさり、離れては合わさりを繰り返す。

いつしか意識をいくつにも分けることに喜びを見出すのだ。
なぜなら、私という意識を、私たちで共有することが出来るから。
私が感じることのできない感覚を、別の私が感じている。
その体験が合わされば、どれほどの感動が待っているだろう。
そして同じように、私が私を知るために感覚と意識は分かれていく。
私という宇宙は、感覚という対比によってその存在を認識する。
分離はこうして始まったのだ。

宇宙はいつしか銀河の渦となる。
いくつもの意識が銀河となり、宇宙はその存在を分裂させていく。
銀河の先にある星たちの意識が、それぞれの思いをつなげていく。
ひとつの銀河の中で、太陽が生まれる。
太陽の周りに惑星が生まれ、青い星が生まれる。
地球が生まれたのだ。

意識は拡大を続けていく。
それは同時に縮小でもあったのだ。

人間という意識が生まれるまで、どれほどの宇宙の体験があったのだろう？
どれほどの愛と、どれほどの孤独を味わったのだろう？

私たち人は、そのことを思い出さなければならない。
地球から宇宙へ、宇宙から宇宙群へ、そうしてその先に、あの懐かしい壮大な光の柱があるのだ。

僕はまだ一度しか触れることが出来ていない。
どうやってあそこにたどり着いたのかわからない。

ただ、言えることは、人間としても、スピリットとしても、その壮大な光の前では、私は私であることしか出来なかった。
人間としての自分も、自分であることしかできないのだ。
恐れを抱くことも出来なければ、愛を感じることもできない。
ただ純粋な光が私であり続けることを感じさせた。
愛を感じることが出来ないと書いたが、愛でしか在れないのだ。
ゆえに感じることが出来ないのである。

そこには、ただ愛のみが存在している。

そして、その壮大なる光と触れている間私は、肉体レベルで、そして多次元レベルでの癒しが起こり続けているのを感じた。
何が行われているのかはまったく分からない。
ただ、癒され続けていることだけは分かった。

あの世界と、あの光とのつながりが意識的に出来るようになったとき、私は本当の意味で、すべてを悟ることができる。
そう確信している。

そして、その日は想像以上に近いのだということも分かっている。
このテーマの中に、その壮大なる光と触れ合うためのヒントが隠されている。
僕はこの流れを超えて、たどり着くことが出来た。
あの偉大なる光と、再びつながることが出来ると知った。その希望が、今の僕に生を与えてくれているのかもしれない。
肉体を持った状態で触れ合うことが出来るその感動は、言葉では伝えきれない。

ただ、つながりさえすれば、完璧なる存在で有り続けることが出来る。
それこそが、真の悟りであり、真の光なのだろう。
すべてはあなたの中にある。
あなたという宇宙を輝かせよう。

生と死

肉体
魂
生命の羽音　死のリズム
亡がらの行方　生命の循環
生の音色　死のダンス
命の息吹　夏の陽炎
闇に光る月明かり　静かなる死
けたたましく鳴るサイレン　死に行く光はいずこへ
ここで産まれ　ここで死ぬ
きっといつか光に還ることを信じて

繰り返される死
生き行くことの儚さ
死ぬ行く世界のざわめき
心晴れるまで愛を抱く
涙枯れるまで僕はゆく
いつか見た未来が
いつか見た明日が
光り輝くことを信じて
僕は明日を目指すんだ

希望の日

夕闇の中の小さな灯
見たことのない明るい闇が
未来を照らす
まぶしく光る闇
君は何を照らす
真っ暗な光
君はどこへ向かう
優しく頬をつたうその雫は
いったい何を流すのだろう
永遠に出会うことのない「あい」が
永遠に消えることのないこの闇が
世界を照らすまで
僕はゆくよ
いつかの君が
ここに還るまで
いつかの僕が
命を咲かすまで
華やかな色と
虹色の海
天に昇る龍雲（たつぐも）
地をはう雷（いかずち）
生命の轟が
この星を揺らす
重厚なその扉の向こうに
広い広い宇宙が待っているのだ
僕たちの明日が
待っていたのだ
宇宙のざわめき
この宇宙
個の宇宙
僕たちはひとつの世界に
ひとつの宇宙に生きている

無次元

無次元
それは宇宙の狭間
それは次元の隙間
無空間という空間
次元の無い次元
果てしない無
無が在るという状態
無という存在の次元
そこにはなにもなく
ただあなたがいる　在る
宇宙ではない空中
空ではないソラ
ここではないどこか
それはどこにあるのだろう
我々は無を持て余してきた
無など無いと
無から始まると
だまされてきた
ここはどこかと
あなたは問いかけたことだろう
なんどもなんども
答えの無い答えを探して
そしてたどり着く
今というこの時空へ

時を超え
今を超えて
たどり着く
そこにはすべてがあった
光もあった
闇もあった
君がいて
僕がいた
果てしない空と
果てしない宇宙
生まれたのはいつか
無次元という次元

無次元という矛盾
無の時空
無は無ではないのか
無は生み出されるものだ
「在る」によって生み出される「無」
人は「在る」とき「無」になる
人は「在る」とき「無」を産むのだ
この宇宙で
みんなで生きる宇宙で
私は何を知るのか
ちっぽけさか
無力さか
愚かさか
それとも・・・

私は目覚める
ここに在るというその場所で
私は目覚める
ほかでもない私へと
私は目覚めたのだ
この宇宙の中で
私という創造物は
たったひとつのオリジナルだと

私は目覚めたのだ
この宇宙は一つではないと
宇宙を超えた世界
宇宙（そら）の庭
いくつもの星
浮かんで見えるは鈍色の世界
そこで私は立っていた
動くこともできない
話すこともできない
なぜならそこは
無空間
歩けない
進めない
私は気づいた
無の空間

私は存在しているのだ
私は今ここに位置するのだ
移動とはそういうことだ
足下にはいくつもの宇宙
その上に立つ人影
無の存在
無を有する存在
人

そして知ったんだ
宇宙とは実験
宇宙という実験
人は無で始まる
無を有する人として始まる
時がきて宇宙へ入る
そうして知るのだ
愛を
孤独を
光を
闇を
ただ作りたい宇宙がそこには並んでいる
そしてただそこに入るのだ
オリジナルの闇
オリジナルの光
そこから魂も始まる
原初はどこか
原初は闇か光か
いくつもの宇宙を体験し
「我有り」と気づく
この宇宙の始まり
私はあなたで
あなたは私なのだ
元々は私だったのだ
この宇宙で
個の宇宙で
私たちはいったい何を見ているのだろう
何を忘れてしまったのだろう

地球に立つ自分に気づいた

宇宙に立つ自分に気づいた
その先にある自分にも
今ひと雫の涙が伝う
私の始まりと
宇宙の真実
命の息吹と
この世界の儚さ　偉大さ
遠く果てしない私の細胞は
今ここでなんと小さく
なんと壮大な生を有しているのか
私が宇宙で始まったのなら
人なる私は
神秘の中にある
私が細胞であり
宇宙の遺伝子を受け継ぐもの
神なる宇宙は
私だったのだ
神なる愛は
私が生み出したのだ
そして
ここにはなにひとつ
存在など無かったのだ

手のひらの感覚

ぬくもり　やすらぎ
心地よい音が
僕をゆする
君のいない世界で
僕は何を見た
涙しか無い日常に
僕は愛を知るんだ
離ればなれになったけれど
ここに
ここで
僕は生命（いのち）を輝かすんだ
ありふれた日常
せわしなく流れる人並み
いつから僕らは忘れてしまったのだろう
未来を
いつから僕らは忘れてしまったのだろう
手をつなぎ合うことを
僕は知ってるんだ
世界はここにあること
命は僕が吹き込むことを
この果てしなく
遠い世界に
僕が命を吹き込むんだ
あの怒りに
愛を見るんだ
あの悲しい涙に
夢を

争いに
真実を
言葉に
自由を

僕は見たんだ
君が楽しそうに微笑むのを

僕は見たんだ
君のいた世界が光にあふれていたことを
優しく　強く
僕は生きるよ
君が僕を守っていてくれるから
背中を押してくれるから
いつまでもそばにいる
その優しい思いを
僕は知っているんだ
君のいた世界に
僕も戻れるから
君のいない世界を僕は大切にするから
いつか
いつかまた巡り会えたなら
優しく僕を抱きしめてほしいな
だってこの世界で
すべてを忘れてしまったこの世界で
一生懸命がんばったから
悩んで　泣いて　苦しんだから
笑って　怒って　仲直りしたから
この寂しくも温かい世界で
僕は愛を見たんだよ
僕の愛を
人々の愛を
星たちの愛を
みんな笑って
僕にほほえむんだ
僕だけが一人孤独を感じていた
みんなはただ楽しげに見守り続けてくれていたんだね
僕の背中をそっと押しながら

僕たちはひとつだよ
これまでも
これからも
ずっと一緒だよ

闇から学ぶもの

この地球で、魂を持つものとして、一人一人には使命がある。
そこに疑問もある。
でも、どうしてもやりたいと思わずにはいられない、これしか無いと思えるようなそんな強い思いがある。
それはきっとみんな同じだろう。
それを使命というのだろう。
光の使命。
愛をもたらし、伝え、癒す。
光を降ろす。
闇とは何か。
闇にも命がある。
それは表現としての闇。
この地球で、人として、支配を目指すものがいる。
彼らも同じく創造を目指している。
彼らの理想とする世界のために。
光の使命。
地球に光をもたらし、愛を広め、思い出すこと。
そして、愛の世界を創造すること。
そこに何の差があるのだろうか。
光も闇も目指していることは同じだ。
一つになることを目指し、創造を志す。

それぞれの概念は対局にある。しかし、そこに善悪は無い。
我々は創造をしている。
創造しかできないのだ。
この宇宙においては。

闇の使命を持つものたちに、私たちが学ぶべきこと。
それは、どんな邪魔が入ろうとも、己の真実を全うすること。
それが殺人であろうが、支配であろうが同じこと。
人を救おうが、癒そうが同じこと。

それぞれが真に望む現実を生み出すことでしか、私たちは生きられない。
闇は常に現実化をわかりやすい形で表す。
戦争、差別、イデオロギー、煽動。
光はどうか。

愛。平和。調和。ワンネス。
助け合い、励まし合い、手を取り合う。
何か大きなことをしようとすれば、自信が無いとか、不安だとか、お金がないとか、何かと理由を付けて先延ばしにする。
それに対して闇はなりふりかまわない。
なぜなら、それが使命だから。
しかしいつか彼らも気づくのだろう。
それは愛を目指していたのだと。
孤独感や、疎外感、劣等感から闇の使命を負ったことを。
すべてが愛であるなら、光も闇も無い。
愛のみがそこに存在し続けている。
そして、宇宙を超えてみれば、愛こそが創造物であったことに気づくだろう。
我々には創造のみが与えられている。
それは愛であり、私たちの最後の希望でもある。
私たちは目覚めなければならない、この地球で、創造の場を捧げられているということを。
自然と調和し、地球の一部として生きることを。
僕たちは生かされているのだということを。

愛のすべて

偽りの愛
真実の愛
そこになんの差があるのだろう
条件付きの愛
無条件の愛
そこにどんな隔たりが・・・
愛がすべてだとわかってはいる
だけど一方で
愛も創造物だという感覚もある
どちらも真実
創造がすべての始まりならば
愛はどこから始まったのか
愛はどこにいたのか
愛はどこにもいなかった
愛という存在がそこにはあった
私たちは知らずにいた
目指していた愛が
どこにもなく
どこにでもあるということを
この世界で
広い宇宙で
愛のみが真実だとするならば
すべては幻なのだろうか

そうではなく
創造はすべてなる愛が司る
真実は無数にある
蔑む愛
讃える愛
傷つける愛
抱きしめる愛
憎しみの愛
優しい愛
争う愛
手をつなぐ愛
僕たちはいつだって愛の中にいた
それが善と言われようと

悪と言われようと
本当に目指している場所はひとつなんだ
どこにいても
なにをしていても
僕らは常に愛の中にいる
たとえ殺し合う戦争の中にいても
互いを讃え合う優しい世界にいても
そこに
誰もが逃れることのできない深い愛が存在している
闇の愛
それは殺人
それは暴力
それは支配
光の愛
それは息吹
それは歓喜
それは至福
そこになんの違いがあるというのか
僕たちに与えられたこの創造の胸の中で
光など在るものか
闇など在るものか
すべては純粋な愛とともに存在し
許すことも許されることも無い
すべてが愛の輝きとともに
命の輝きとともに繰り返される
それが僕らに与えられたこの瞬間であり
この宇宙の中でのかけがえのない体験
あらゆる体験が
今日の僕たちの記憶の中に蓄えられてきた
そして今
この時代
このときに始めること
それは
『創造』
すべてを知り
感情を知り
光を知り
闇を知った
存在の存在を感じた
愛がすべてであるこの宇宙で
あなたは何を創造するのだろう

あなたは何を選択するのだろう
この宇宙に
この世界に
命を吹き込むのはあなただ
目の前に広がる世界に
物語をつくるのはあなただ
この手に
この思いに
この地球に
愛を吹き込むのは
あなただ
ただひとりの
あなたなんだ
目覚めよ
光の子

命を芽吹かせて

　創造とはなんなのだろうとずっと考えていた。
　現実化のためのビジュアライゼーション。それはとても効果的。パワフルな方法。でも、それも僕にとっては誰かの答え。僕は僕なりの真実を見つけたい。
　そして、ひとつの答えを見つけたんだ。そのヒントになった言葉。それは…
『命こそが愛』
この星で
大地に根を張り
空を見上げ
太陽をあおぎ
月を超える
優しい風と
暖かい雲
恵みの雨に
沁み入る声
生命の息吹と
命の音
僕らの体に
血が巡る
山を切り裂き
森を刈る
水を濁らせ
すみかを奪う
いつしか大地は呼吸を忘れ
固まる石で
土は眠りに
灰色の空と
黒い海
空気は乱れ
殺し合う
力を持つ者が
大地を滅ぼす
僕らは人だ
意識を持つ人だ
意志を持つ人だ
過去は変えられない
現実は変えられない
でも未来は変えられる
ありきたりな言葉が

胸に響く
この時代に生きる僕たちは
もう一度生きる
自らの過ちと
人類の愚かさ
自然を滅ぼし
命を滅ぼす
今までは

この世界に
この地球に
この肉体で
今から生きる
創造とは
ありふれた日常に命を見いだすこと
何かを生み出すのではない
出来事に
モノに
命を吹き込むのだ
目の前の木に敬意を表し
太陽を尊び
月に涙を
受け継がれた命と
守り続けてきた思いを
僕たちは受け継ぐ
偉大なる感謝と
未来への一歩
一人一人が目を覚ます
すてられた
廃棄された命たち
一つ一つの物語
僕を支え
学ぶことを教えてくれた命たち
自然から生まれた
すべての道具に
僕は命を吹き込むんだ
日常のありふれた光景に
命という愛を
感謝という愛を
僕が吹き込むんだ

つながっていくこの思いを
僕は信じてる
目の前のすべてに
命を吹き込もう
モノはモノではなく
光に満ちた命の種
あなたの世界を輝かせる
命と命のハーモニー
あなたの意思が
誰かの　なにかの
命となる
目の前に広がる日常に
あなたはどんな物語を奏でるのだろう
僕の知らない
誰も知らない
命の物語が
世界中で始まっている
これまでも
これからも
「命こそが愛」
『創造』とは
この世界に命を吹き込むこと
命をもっとみつめよう

未来に向けて

僕らの未来
過去という未来
今という未来
ここは
未来なのだ
かつての僕が夢見た
目指していた未来なのだ
この世界で
この場所で
今日というこの日をつないで
ここにたどり着いた
明日
僕は何を見る
この世界の
光の中へ
どこにいても
だれといても
未来は今まさにつくられている

心からの祝福

いよいよこの時が来た
果てもなくさまよい続けたこの魂の旅
ゆくあてもなくただよい
寂しくも出会いの多き旅だった
あの懐かしい匂い
やわらかい温もり
いつか帰るからと約束した
あの日
たくさんの苦難と
たくさんの笑顔によって
今日までたどり着いた

そして気付いたんだ
僕の探していたものなどどこにもないことに

僕は気付いたんだ
ここにあるすべてが
僕であることに

あの日夢見たこの星は
ひどく傷ついていた
感謝を忘れ
木々を倒し
海を汚した

動物を殺め
訳もなく仲間を罵る
この荒れ果てた星で
僕はなにを目指したのだろう

この星を救う
人々を救わなくては
そんな思いが

僕を奮い立たせたのだ
でも
僕は知ってしまったんだ
救うべきは僕自身で
救われるべきは僕の傷ついた心だった
宇宙という壮大な映写機の中で
僕は心をもらった
人と人とのつながり
温もり
優しさ
実態のあるこの場所で
僕は愛を知ったんだ
揺るぎのない信念と
勇気
心晴れるように
僕たちは祈った
遠い星から
宇宙の果てから
何万年
何億年と
遠い未来からやってきた
この場所に生きるは僕の運命（さだめ）か
数ある星の中から
数ある宇宙の中から
この僕を選んだ
燃え盛るような情熱と
狂おしいほどに人を愛す
いつかの君を目指して
たとえこの身が滅びても
この思いは受け継がれる
宇宙という記憶の中に眠る
僕という星
この美しい世界を創ったのは
ほかでもない僕自身なんだ
神がいるとするならば
それは
すべての内に眠る僕
そして
この世界のどこにも
僕はいなかった
ただすべてが在った

ここに在る僕は
創造という名の下に
生み出されし
神の化身
山も海も森も
鳥たちも
大地に眠る命
すべてが神であり
愛である
僕の中に愛が在る
愛の中に僕が在る
存在という
命という愛に
僕は抱かれていたのだ
やるべきことはただ一つ
この生を　性を
抱きしめるような
この生を
純粋なまでに全うする
それは
『生きる』
ということだ
『生き続ける』
ということだったのだ

愛に眠りし無垢なる子　ソラト

存在の証明について

存在とは何か
不存在とは何か
インデックスのように片付ける
未来は存在しているか
今は存在しているか
過去は存在しているのか
私は　神は　あなたは
本当に存在しているのか
この世界を定義しているのは誰か
存在を定義しているのは誰か
私という思考が現実化するというのなら
過去も未来も
すべては私の創造によるもの
しかし、私は本当に存在しているのか
遠く彼方のだれかの思考を現実化しただけではないのか
それは人か
悪魔か
それとも神か
宇宙が認識される前であっても
宇宙は存在していた
私が存在であると気付く前であっても
私は存在していた
認識は誰がするのか
私の知らない世界は本当に存在しているのか
見えない世界の出来事は
小説のようなものか
存在はだれが証明するのか
認識によって定義されるのか
存在とはなにか
存在の定義とはなにか
この宇宙に実態はあるのか
私は本当に存在しているのか
私は存在しているならば
なぜ世界は争うのか
私が存在していないならば
この世界も存在していないはずである
私という不存在は世界を見ることができないから
ではこの知覚している世界とは何か

私は何を見ているのか
生命とは何か
私は生きているのか
存在としてみるとき
死という概念はない
存在が消えることはないはずである
であるならば
死とは何か
死とは存在の消滅か
生とは何か
存在の証明か
違う
すべてが同時に発生している
私は死であり　生である
私は人であり　神である
私は存在であり　空白である
私は眠りながら　目覚めている
無という存在があるなら
無という有があるのなら
すべては対比によって創造される
無しかなければ
概念も定義も何も必要がない
存在を証明する必要すらない
無のみがありつづけているから
では無を定義したのは誰か
それは無か
無の中になぜ知覚があったのだろう
無がなぜ無に気付いたのだろう
そこには無が在るとだれかが認識した痕跡がある
それは誰か
神か
神を超えた存在か
そもそも定義とは何か
人の概念だ
名前を付けたり
決まり事をつくったり
概念も定義も思考が創り出した幻だとしたら・・・
もう一度問いたい
存在とはなにか
存在という定義すら存在していない
すべてがただ在り続けていたという真実を

私たちは受け入れることができるのだろうか
そこには善も悪もない
存在そのものの定義もない
ただひたすらに
すべての存在が在り続けているのだ
在るという現実に
私たちは気付かなければならない
無が在り
有が在ったのだ
始まりが在り
終わりが在ったのだ
そしてすべてが
同時に行われ続けている
創造とは
在ることを知ること
在るという現実を創り出すこと
在るを定義するのは一人一人の優れた思考である

存在の証明に関わる愛の魔術師　ソラト

集合意識からの独立

集合意識と創造

集合意識。それは私たちを形作るもの。私たちの存在の証明。私たちの意識は常に集合意識に左右されている。地球における社会システムもまた、集合意識の同意によって成り立つ。自然災害すらも同じである。それは破壊による再生。破壊により生まれる、新たな意識。私たちに出来ることは、いかに早く目覚めるか。
目覚めとは、自らに気付くこと。
目覚めとは、命に目覚めること。
社会でも、お金でも、システムでもない。
ただひとつの命である。
この限られたときの中で、永遠の今を生きる。この命を、命として生きることである。それは自然とともに、地球とともに生きることである。自動的に成り立つと錯覚しているかのような衣食住。そこには人がいる。自然がある。誰かの力が、目の前に広がる多様な物質世界を形成してくれている。モノはモノではない、機械化されたこの世界に、私たちは気付かなければならない。
大地とともに生きること。
モノの背景に広がる、大きな命のつながり。
そこにこそ、一人一人の真実の姿がある。大切な、大切な命がある。目覚めよ。この命。
集合意識は私たちをどこに導くのか。
それはカオスか。神の世界か。
私たちはもう既に、集合意識においてカオスに同意してしまった。このカオスは、社会に対して、システムに対してのものである。またある部分では、文明に対して、地球に対して、人類に対してのカオスである。
それが、地球にとっての、人類にとっての最善なのか。カオスの先に、私たちは何を見ているのか。
それは愛か。新たな世界か。
それは誰が創るのか。それは誰の世界なのだ。
カオスの先にはなにも無い。カオスの先は、カオスである。
集合意識によるカオス。その先に創られる世界もまた同じ資質によるものだ。誰かが助けてくれるのか。真のメシアを待つのか。
メシアとは誰か。メシアとはあなただ。
この世界の救世主はあなた方一人一人だ。
だからこそ目覚めなければいけない。誰かのカオスと、誰かの世界を待つのではなく、あなたの命と、あなたの輝きを。
あなたという世界の創造を。
そしてそれはもう既に可能なのだ。
集合意識が何を望んだとしても、私たちは一人一人の独立した存在として、独立した意識を持つ。その独立した意識に目覚めたとき、その意識によって、本当の、ただひとつの現実を創造することが出来るようになる。もう集合意識の時代は終わった。これからは一人一人がマスターとしての自己を確立し、独立した個別意識の時代だ。
僕自身も崩壊を、カオスを望んでいたことに気付いた。それは人類に対しての怒り、殺意。この力が僕を苦しめた。光と闇との葛藤である。しかし純粋な感情においてはそのような区別はなく、ただそのような意識が存在している。そこに善も悪も無い。善悪の区別すら集合意識が行っているのである。それは自分

には責任が無いということではない。数々の転生の中で、魂の融合の中で、私自身がそのような集合意識を形成してきたのだ。それは過去からの創造であり、過去からの投影である。だからこそ私たちは気付かなければならないのだ。時間は直線的ではないことに。時間は点の連続である。それは断続的に創造され、私たちは時間を飛び越える。魂の選ぶ転生はそういうものだ。
たとえば前世、西暦 1000 年に生まれたとする。その人生が終わりを迎え、次の転生を迎える。しかしそれが魂の進化において最善の道を辿る場合においては、西暦 2500 年を選ぶこともある。そしてそれが終わり、今現在の西暦 2012 年を選ぶことが出来るということである。私たちの多くは、もうすでに遠い未来を知っているだろう。
時間について僕が受け取ったガイダンスをひとつだけ伝えておきたい。時間の認識と、未来の創造に関する捉え方に少しでも活用してもらえればと思う。
未来は過去の下に存在する。
未来を定義するために過去を体験している。
未来にたどり着くための前提条件として、過去を、今を体験しているということである。
今というこの瞬間も、未来によって創られている。
この理解における現実の創造は、逆もまた真である。
ラムサ
このメッセージは、あるときにラムサというマスターの話が突然情報として入ってきて、ラムサという存在について調べているとき、彼の伝えたことや意識を読んでいると、このようなメッセージを受け取った。これは現実の捉え方が逆転する。
未来はもうすでに用意されていて、その未来にたどり着くために、過去や今を体験しているという。転生として直線的な時間軸における未来を先に体験しているという点から見ても、それはひとつの答えのように見える。未来にもいくつかの選択肢があるのだろうし、その中のひとつを選ぶために、今を定義するというところで、この瞬間のたくさんの選択が、数ある未来からひとつを選ぶということであるならば、すべての瞬間における選択はいかに神聖なものであるかに気付くべきである。未来は変えることができる。それは今のこの選択にかかっている。未来はもうすでに用意されているのだ。すべてを創造する必要が無い。もうすでに創造し終えているのだから。

地球の意識と僕らの命

未来は創造し終えている。これはひとつの大きな指針になる。今私たちは地球という舞台において大きな岐路に立っている。それはどのような選択によって、意識によって現実を生み出していくのかということ。地球という大きな命が、私たちを守ってくれている。
「地球は自らが癒されるのを拒んでいる。」
このガイダンスはリーディング中に受け取った。衝撃的だった。地球は目覚めた意識だと思い込んでいたから。地球は意識としては確かに目覚めている。僕たちの多くの意識の調和を保ちながら、母体として創造の舞台を提供してくれている。しかしその長い歴史のなかで人類がこころを傷つけあってきたように、地球もまた傷ついているのである。なぜ地球は癒されるのを拒むのか。それは人類に対しての信頼と、遠慮である。地球の浄化や癒しのほとんどは、私たちにとっては自然災害という形で表れる。地震、嵐、火山の噴火、天変地異などである。そこには多くの犠牲が伴う。犠牲という捉え方を変えればそれは神聖な計画の一部として魂の選んだ最善であるが、地球の意識は私たちに目覚めのための期間を引き延ばしてくれているのである。そのタイムリミットは迫っているだろう。有無を言わさず癒しがおこる時が来るかもしれない。そのとき地球のこころは再び傷つくのだろうか。地球は知っているのかもしれない。この今の限られた命の中にこそ大切なものが存在していることを。命という愛を。命の大きさを。
それで本当にいいのだろうか。自然災害はカオスなのか。崩壊の象徴なのか。破壊による創造か。ある一定段階においてはそうなのだろう。過去の文明の崩壊もそうであったかもしれない。しかしそれすらも完璧な計画の一部で、大いなる流れの一部であったはずである。失敗など無い。そこにはただそのような現実があっただけである。集合意識がそれを選択し、同意したのである。そして、地球にとっての最善だったのであろう。
私たちはもう一度考えたい。天地がひっくり返るほどの自然の大きな動き。それは人類にとっては脅威かもしれない。命が奪われる。都市が崩壊する。電気が、道路が、建物が…それらすべての主体は人間である。それがいけないといっているのではない。それでいいのだろうかと問いたいのだ。
地球にとっての最善とはなにか。地球にとっての創造とはなにか。地球が主役のはずである。今回の進化の主役は地球なのである。私たちはその地球の進化に貢献するために生まれ変わった。地球を守るために。地球に光を送るために。その中で、一人一人の体験のための舞台としてこの場に生きることを許されているのだ。
もう一度だけ言う。
今回の主役は地球。その流れの一部として僕たちの魂の進化がこの場を選んだ。宇宙がそれを許した。地球もそれを喜んで受け入れた。もう一度思い出そう。地球にとっての最善へと導けるように。地球とともに生きるということを。
災害は起きて欲しくないと僕自身も願っている。命の移行は自然なことだけど、悲しいから。地球が動くことも自然なこと。地球は生きている。だからこそ地球とともに生きるんだ。
僕たち一人一人が地球の癒しに貢献できたとき、あらゆる災害は最小規模で収まる。
宇宙そのものが地球の癒しに介入したとき、あらゆる災害は再大規模になる。
今書いていてこのイメージがわいてきた。これが正しいのかは分からないけど、でも確かにそうなのかもしれないと腑に落ちた気がした。地球のために、自分を活かす。一番最初の、一番大事なこと。僕たちは地球と手をつないで生きる。僕はそれをずっとやりたかった。その方法はいくらでもある。人の数だけある。それぞれがそれぞれの思うやり方でやっていけばいい。そこには新たな集合意識が形成される。地球

とともに生きるという意識だ。それは愛であり、命である。地球よありがとう。という意識である。僕はその意識をみんなと共有したい。それもひとつの夢。地球と生きることを真剣に捉えられるようになったとき、それが目覚めのときなのかもしれない。

覚悟と問い

集合意識が何を望んだとしても、僕たちはそれを越えることが出来る。集合意識による創造から離れることが出来る。それが今、僕たちに必要な本当の選択。
それが、「集合意識からの独立」。
そしてそれは、「個としての宇宙の完全なる創造」である。
そしてこれが、「宇宙のつくりかた」である。
ここにたどり着いて、僕はたくさんのメッセージを受け取った。それは厳しくも、愛のある質問。
「あなたは　この宇宙を　本当にゼロから創造する責任が負えますか？」
「あなたは　今この瞬間に　死を受け入れる覚悟が出来ていますか？」
「あなたは　神聖なる存在として　関わるすべてに　命を吹き込むことが出来ますか？」
この問いをハイアーセルフや高次の存在たちから投げかけれられたとき、僕は自分の甘さに気付いた。軽い気持ちで創造を考えていたから。適当に委ねておけばいいやと。そのような方法もあるのだろう。でも、僕はこの問いをハートに落とし込むと、なんとも言えない悲しさと、切なさが表れてきた。神聖な世界に対する認識の甘さと、存在に対する敬意を失っていた自分。命に対する軽視。愛を信じていないこと。エゴによる創造。突きつけられた課題はとても大きなものだった。だからそのとき僕はこう答えた。
「今の自分はまだ十分に癒されていない。だから、創造の責任は負えない。」
癒されていない自分を受け入れることは大きな意識の転換だった。前にも一度あったけど、そのときも僕は大きく泣き崩れた。癒されている自分を演じることの辛さ。癒しを受け入れることへの抵抗。自分を保つことが不可能になる瞬間が何度もきた。そうして少しずつ自己という枠組みから外れることが出来るのだろう。
癒されていない自分を受け入れて、しばらくして、もう一度その問いを感じてみた。そこにはもう変化した自分がいた。
「たとえどのような現実を創造することになったとしても、僕はそのすべてを神聖なものとして受け入れる。それが僕自身であり、僕の命の一部だから。」
時はきた。創造のときだ。恐怖はある。葛藤もある。でも僕は決めたんだ。本当の創造とはなにか、本当に生きるとはどういうことなのか。それを確かめること。自分を偽らずに生きること。出来ないときもあるだろう。でもチャレンジした自分をもっと受け入れたい。もっと伸ばしたい。僕はこれまでなんども生きることをあきらめそうになったけど、この世界から、この宇宙から消え去りたいとなんども思ったけど、それでも僕は生きる勇気をもらった。それは出会った命に、触れ合う存在に、そして、僕自身の夢に、大いなる愛に。
僕は一歩を踏み出す。ようやく出番がきた。待ちに待ったこのときがやってきたのだ。これまでの思いと、感動を力にして、僕は伝えることをあきらめない。伝わることを目指しているのではなく、かつての僕を救うため。僕が触れたかった、出会いたかった言葉をこの世に残すために。僕は生きるよ。
泣きたいときもあるだろう。孤独を感じることもあるだろう。命を投げ出したくなることもあるだろう。でも、それでも信じている。必ず素晴らしい未来がやってくると。必ず素晴らしい今が始まると。この世界にきちんと愛を吹き込む、命を吹き込む。この世界を命という愛で満たすために、僕は覚悟を持って生きるんだ。それが今の僕に出来る創造の出発点。
過去を解き放ち、叡智を開き、ここに統合する。
合わさる命が愛となり

重ねるこの手に思いが宿る
見えざる世界の意志を貫き
確かな愛をここに舞う
すべてはひとつ

「0（ゼロ）」

僕たちの次に歩むべき道。それは『0（ゼロ）』
意識をゼロに、善でも悪でもなく、光でも闇でもないゼロ。ニュートラルな意識で、という意味ももちろんあるが、ここで伝えたいことは、僕が受け取ったエネルギーとしての、創造としての『0（ゼロ）』。それは宇宙の始まり。それは意識の始まり。
私たちの多くは、意識的にも、無意識的にも存在を外的に認識している。それは人、それは地球、それは宇宙、そして命。
一方で、私たちの中にすべてがあるという意識ももっている。それは思考として、答えとして、イメージとして。
チャネリングですらも私たちは外的な存在としてつながろうとする傾向にある。もちろんそうでない方もいらっしゃるだろう。しかし、スピリットは僕の意識をシフトするためにこんな刺激的な方法を教えてくれた。
それが『多次元のシャットダウン』。多次元を閉じるということだ。これはどういうことか。
私たちが外的に宇宙とつながることを卒業し、内に持つ神聖な源とつながり、すべてなる存在とのつながりを本当に思い出すためのスピリットたちからの提案。
多次元を閉じ、ひとつの宇宙として、自己の宇宙としての個を感じる。そこは静寂であり、また別の言い方をすれば孤独そのものである。そして、それはすべてひとりひとりの純粋な創造の始まりのエネルギー。その宇宙にはあなたしか存在していない。
そこで闇を感じ、光を感じる。宇宙を感じ、あなた自身を感じる。そこにある感覚をただ感じ続ける。すべての創造はあなたが生み出したものである。そのことを宇宙の原初として体感する。
創造の源としての自己を認識したのなら、再び多次元を開く。多次元を再起動する。
そしてそこに流れ込む存在たちのあふれる純粋なエネルギーを感じる。命のつながり、ひとりではないということ。ともに生きるという温かさ。そこは共同創造としての宇宙。共有する場としての宇宙。
あなたのもつオリジナルの宇宙を知ったのなら、もう一度考えてみて欲しい。あなたはこの宇宙をどのように創造するか。
あなたはこの宇宙にどのような命を吹き込むか。
創造はそこから始まる。
まずはそこから創造にアプローチしていきたい。そのためにこのエネルギーとビジョンを受け取った。実行し、体感し、次につなげる。その先にある新たな真実が僕を奮い立たせる。
『0（ゼロ）』に始まり。再び『0（ゼロ）』を目指す。
そこは始まりであり、終わりである。
始まりも終わりも同時に起こり続ける世界。時間のない世界。
創造とはなにか。これから僕たちは、本当の創造を体験するのだろう。
永遠なる愛をここにもたらすために・・・

終わりに

第一弾として僕の中に眠っていた感覚を掘り起こしてみた。
ここにある命の循環。生命の躍動。
僕の目指す創造は、もう始まっている。
この本には僕のひとつの集大成としてのエッセンスを詰め込んだ。ひとつの区切りとして、新たな意識に向けての第一歩として、自分を振り返る手段にもなった。
僕としてはかなりいいものに仕上がったと感じている。もちろんまだまだ伝えたいことはたくさんあるが、『輝く宇宙のつくりかた』というタイトルに必要なエッセンスは広がっているはずだ。僕は信じている。この本が宇宙を開くことを。僕は信じている。この本が、僕を想像を超えた未来へ導くことを。
もしこの本がなにか新しい意識と、だれかの心に愛を生み出すきっかけになれたのなら僕はそれでいい。
意識は命だ。意識が命を定義するのなら、存在は消えない。意識のシフトは存在を消し去るのではなく、新たな命の始まりだ。
意識は終わる。そしてまた始まる。すべては同時に起こる。
死を迎え、同時に生まれる。そして生まれた瞬間に、死ぬのである。
『輝く宇宙のつくり方かた』というタイトルで書いたのにももちろん理由がある。
　僕は創造という言葉の意味がよくわかっていなかった。見に見える現実や出来事を、自分の思い描く平和な世界にすることだと思っていた。それでも、そこには疑問があった。本当にそれだけなのだろうかと。
　探求だけを目指し、答えを探し続けてきた。そうしてたどり着いたいま、宇宙をつくるという創造が今回の大きなテーマだということが分かった。本当に宇宙をゼロから創れるのかという実験のようなもので、この本の中にも宇宙という実験についての章があるが、それは宇宙の外からやっていたものだ。今回は違う。宇宙を内側から創り出すのだ。もちろん自我を越えて、ハイアーセルフとともに、そして多くの光の存在たちとともに。僕は、僕という宇宙を完成させるためにここに来た。
　与えられた宇宙ではなく、僕というひとつの宇宙を生きるのだ。ひとりひとりの大いなる計画の中で、いま僕たちの生きる宇宙を共有している。多くの平行現実の中で、瞬間の選択を続けている。この本には書いていないが、時の創造のビジョンも見た。いくつもの未来が、瞬間が常に生み出されている。その中で僕たちは次の瞬間を選択し、現実として生きている。
　ひとりひとりの生きる宇宙を、ゼロから創造するためのヒントをこの本には書いたつもりだ。もちろん宇宙を創るということだけでなく、日常でも、意識というところでもなにかしらの刺激になってくれるだろうと信じている。
　僕は僕なりの真実を生きる。そこに善も悪もなく、愛という選択のみが在り続ける。すべてはひとつで、すべてでひとつである。
　この奇跡のような今を、刺激的に、感動的に生きることが出来るよう、日々多くの存在たちにサポートしてもらっている。
　地球という母体で、僕たちは人間としても目覚めなければならない。すべての価値は命にある。自然という恵みに敬意を表し、僕らは新しい今を、手を取り合って生きていかなければいけない。
　もうこれ以上地球を傷つけるのはやめよう。命を奪うのはやめよう。もう悲しみは十分すぎるほど味わってきたのだから。

感謝とともに

この本を書くために、たくさんの応援と愛を送りサポートをしてくれたハイアーセルフに、守護天使に、スピリットに、光の存在たちに、ガイドたちに感謝しています。ありがとう。
そして、このような名も無い僕の本を読んでくださった方々、興味を持ってくださった方々にも感謝します。ありがとう。
この本に命を吹き込むのは、読んでくださった一人一人の心です。僕という命を活かせるのも、そこに関わってくれた命があったからです。これまでにたくさんの学びと、ともに体験を重ねてきた一人一人にも感謝しています。
すべての存在に
そしてすべてなる宇宙に
神聖なる源に
そしてこの命に
永遠なる愛を
LOVE & PEACE

たくさんの愛

僕たちがいまこうして出会えたこと
僕たちがいまこうして触れ合えること
ここにいたるまでに
どれほどの命があったのだろう
どれほど多くの出会いと別れがあったのだろう
たくさんの命が受け継がれ
いま　僕は生きている
地球が始まり
命が始まり
僕はたどりついた
いまという奇跡の瞬間へ
たくさんのかなしみとよろこび
たくさんの生と
たくさんの死
僕はこの命で
どんな恩返しが出来るのだろう
命がつながり
出会いがつながり
奇跡が起きた
愛が生まれ
命が生まれる
僕たちは思い出す
多くの愛のつながりによって
多くの命のつながりによって
いま僕らは
ここに生きている
受け継がれたこの命に
もう一度敬意を表そう
今一度
命を考えよう
人を殺めずに活かそう
戦争ではなく平和を
無関心ではなく愛を
手をつないで分かち合おう
この奇跡を
この出会いを
この命を
喜びの雨が

僕らを包むとき
平和な世界は
訪れるのだろう
たくさんの涙が流れたけれど
それ以上の喜びと光が待っている
闘いは終わった
争いは終わった
武器を捨てよう
プライドを捨てよう
ありのままで
うまれたままの
あなたでいよう
僕らはもう一度
やり直せる
再び笑える
その日まで
僕は愛を生き続けるよ

「輝く宇宙のつくりかた」

SORATO & YASU

２０１２年6月２５日　発刊

special thanks

Earth

Universe

生きとしいけるすべてなるもの

and more. . .

BLOG

http://ameblo.jp/ever-beloved/

YASU Twitter

@BelovedEver

僕は信じている

たくさんの命が

たくさんの愛が目覚めることを

独立し

自立したその愛は

互いを支え合い

力を獲得する

地球にあふれる歓喜の涙が

いつしか僕を救ってくれる

いつか夢見た

あの懐かしい未来へ

そして

そのすべては今ここに...

「輝く宇宙のつくりかた」
http://p.booklog.jp/book/52345

著者：SORATO & YASU

belovedever

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/belovedever/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/52345

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/52345

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/**）**

運営会社：株式会社ブクログ